

法賢譯出經典について

——無量壽莊嚴經を中心として——

柴 田 泰

本論文は、法賢譯出經典七十六部中、唯一の淨土經典である大乘無量壽莊嚴經の特異性が、他の七十五部を検討する事によつて、何らかの相似性を見出せるのではないかと云う事を目的としたものである。大乘無量壽莊嚴經は、淨土教思想を示す經典として、最も大きな比重を占める梵藏漢無量壽經の一異本でありながら、本願文を初めとして各章段・偈頌の轉化・省略、並びに思想形態の相違等で、諸異本中、特異な經典としてその位置づけにも諸説の多い經典であるが、法賢譯出經典の分類から見ると、他に淨土經典と考えられるものが無い點に於いて、特に全體の三分の二を占める密教經典の譯出から考えても、その特異性が何らかの影響による譯出者の意圖から爲されたのではないかと云う疑問が生じるわけである。

譯出經典を検討する場合、先ず第一に指摘される點は、無量壽佛・極樂の名稱とその内容についてである。法賢譯出經

典中、無量壽佛並びに極樂に關する語が記載されている經典は十一部あり、その中、較量一切佛刹功德經を除いた他の十部はいずれも密教部に屬し、しかも異譯は無い。無量壽佛の名稱に關して云えば、密教經典八部に「無量壽佛」二十一箇處（その中、密教五佛中の一佛としては八箇處、陀羅尼中に「阿弭（彌）多」六、諸佛名列舉の中に「無量光」一個處示される。華嚴部に屬する較量一切佛刹功德經について云えば、佛陀跋陀羅譯六十華嚴壽命品・實又難陀譯八十華嚴壽命品・玄奘譯顯無邊佛土功德經と相應し、「無量壽佛・極樂世界」と表現されている個處が、六十・八十華嚴ではいずれも「阿彌陀佛」・玄奘譯では「無量光佛」と表現されている。此の原語を考える爲に、更に三者の譯語を検討すると、佛陀跋陀羅は六十華嚴入法界品に「無量壽佛」二・「阿彌陀佛」一「無量光佛」各一、他の經典三部に「無量壽佛」二・「阿彌陀佛」一、實又難陀は八十華嚴入法界品に「無量壽佛」二・「阿彌陀

佛」一・他の經典五部に陀羅尼として「彌陀婆耶」一・「阿彌陀佛」七個處示される。玄奘は稱讚淨土佛攝受經に「曰」極樂「其中世尊名無量壽及無量光如來應正等覺」(「光明無量の故に」名無量光)とある外は十方段を除いて、すべて「無量壽佛」であり、此れは現存梵本と殆んど一致し、他の經典

二部では、「無量壽佛」・「無量光」各一個處示される。従つて、實又難陀は一個處を除いて他は「阿彌陀佛」を用い、佛陀跋陀羅・玄奘は定つていない。しかしながら、諸譯者中、最も玄奘譯が信頼出來るとされ、また、Gaṇḍavyūha に示される語が「Amitābha」である事を考えると「無量光佛」が正しい譯語と云えよう。また、密教部所收の無量壽佛名の記述を見ると、陀羅尼故の音譯か、諸佛名列舉の表現を除いて、いずれも法賢は「無量壽佛」と云う譯語を用いていたと云える。翻つて、無量壽莊嚴經に於ける譯語は、十二の名稱を以つて示す個處を除いて、いずれも「無量壽佛」であり、しかも他譯に見られない表現として「立名無量壽」佛名無量壽」と一名稱としてとらえ、内容的には「彼佛如來來無所來去無所去無生無滅非過現未來」と表現されている點を考へ合わせると、彼は原語の如何にかゝらず、すべて「無量壽佛」と表現し、しかも、密教經典譯出に於ける五佛中の阿彌陀佛的内容を持たせていたと考えられる。次に極樂の名稱について云えば、五部六個處に「極樂」四・「蘇

珂嚩帝」二個處示されるが、見るべき特異性は無い。しかしながら、大吉祥陀羅尼經の「如是我聞、一時佛在蘇珂嚩帝佛刹」と頭初に述べられる記述は、通常「如是我聞、一時佛」と說かれる佛が釋尊である事とは矛盾しており、他に例が少ないと思われる。

第二に指摘される點は、無量壽莊嚴經の他譯に比して轉化、省略が見られる事についてである。此の顯著な例として、決定義經が挙げられる。此の經典は「決定正義」の法として五蘊から八正道迄二十一名義を説いているが、同じ内容を説く法乘決定經三卷は二十五の名義を記述し、三名義を除いて相應せる名義は兩經とも順序は等しく、しかも、法乘義決定經には決定義經の最後八正道以降に五名義が説かれている。比較し得る經典が一經だけであり、兩經の成立の明確な位置づけは出來ないにしても、決定義經に缺ける名義は古くから見られる名義であり、また、初めに列舉される各名義の終りに、決定義經では「如是等法 是名決定正義」と後の省略が讀みとれる語を用い、法乘義決定經は、それを示さず、引き續き各名義の内容を説いている點を考えると、法賢は八正道以降を省略したと考えられる。更に、解夏經・大乘八大曼拏羅經・虛空藏菩薩陀羅尼等を初め、何等かの意味に於いて異譯を持つ經典が、殆んどすべて、字數も少なく、更に、非譯出經典七十六部中、卷品を持つ經典がわずか十一部で、非

常に短かい經典が多い事を考え合はすと、法賢譯出經典には抄譯と云う特徴が指摘出來よう。

第三に指摘される點は、容易に意譯され得ると考えられる語を音譯している事である。此の點に關しては、祕密故に音譯する陀羅尼を除いて、その前後關係から容易に判斷出来るのは諸佛或いは諸佛國の列舉個處に於いてである。無量壽莊嚴經には、過去三十七佛名と他方菩薩の淨土往生を説く十三佛名の二個處が示され、後者はすべて意譯であり無量壽經諸本との比較も容易であるが、過去三十七佛名の中には二つの音譯佛名が示される。此の個處は魏譯無量壽經では過去五十三佛として著明であり、諸異本の比較については、無量壽莊嚴經過去三十七佛は、梵本八十佛中の第四十二佛迄に同じ順序で一致し、支那譯では唐譯無量壽如來會と最も關連性を持ち、その中の二つの音譯佛名（鉢囉多波野輸・贊那義説囉護）はその前後から考えて、Pratāpavati, Candanagandha である^⑨と考えられる。同様の形態が較量一切佛刹功德經に於ける十佛十佛國名にも見られる。前述の如く、六十・八十兩華嚴、玄奘譯の異譯を持つ本經典は、經題の示す様に一切の佛國功德を較量する爲に、いずれも等しく十佛とその佛國土を列舉している。他の三譯はそれ等をすべて意譯語を用い、本經も第三を除いて意譯語であり、夫々が容易に比較され得るが、本經の第三番目の佛國土（阿彌弭沙世界嚩日囉婆説囉鉢囉

摩哩那義佛刹）だけは音譯語である。他の三譯はいずれも袈裟幢（聖服幢）世界の金剛堅（固歡喜）佛刹と記されてあるから、本經でも同様であつた事に疑いは無いし、また、現在の漢音から推定してもある程度は可能である。更に、此の語は從來の中國翻譯論から考えても音譯すべき語でも無く、法賢が意譯出來なかつた語でも無い。従つて、その用いられている各文字が、いずれも彼がその多くを譯出している陀羅尼に於いて用いられている文字である事を考え合わせると、彼の譯出せる陀羅尼經典の影響を多分に受けていると同時に、彼の譯語に對する曖昧さを示す事に外ならない。此の事は比較的列舉名の多い他の譯出譯典にも見られ、また、すべて意譯語を用いている個處もあり、列舉名の少ないのも取り擧げると全く統一はとれない。従つて、音譯語について、名稱の列舉と云う大まかな點からも云い得る事は、彼は譯語に對しては意譯可能な名稱であつても處々音譯語を用い、特殊な意味を持たせて、音譯語を用いたわけでも無く、此の點では必ずしも嚴密なものでは無かつたと考えられる。

最後に指摘される點として、彼の譯出經典から汲み取れる思想形態である。既に、無量壽莊嚴經については諸學者に依り「一切成佛の思想」、「般若思想の影響」等の指摘があり、私は「往生思想と成佛思想の二重の構造」と考えている^⑩。法賢譯出經典については、此の無量壽莊嚴經のみが淨土經典であ

り、無量壽佛・極樂に關する名稱すら十一部にしか示されず、それもその内容が多分に密教五佛中の一佛的表現であるから、往生思想については殆んど見るべきものは無いが、成佛思想については注意すべき記述が見出せる。瑜伽大教王經五卷は、法賢譯出經典中では大部な經典であるが、その第二卷三摩地品に「復說三摩法」で初まり「是名……三摩地」で終る三十六の三摩地法が説かれてゐる。此の各三摩地の記述形態を無量壽莊嚴經三十六本願文と比較すると、その中、二十の三摩地法に於いて内容を説き終つた後に「不久證大菩提」と云う一文が示されている。特に第二十五三摩地法の「若人樂求生佛刹土 彼人決定隨願得生 非久之間速證菩提」の一文は、無量壽莊嚴經本願文に見られる「(令生我刹)……令得阿耨多羅三藐三菩提」の記述と非常に類似している。此の形態は法賢の譯出せる四十三密教部經典を通して、また、同じく譯經に列したと史傳に傳えられる天息災・法天等の譯出經典を通讀しても例を見ない様に思われるが、無量壽莊嚴經三十六本願文の各願の最後に示す「令得阿耨多羅三藐三菩提」と云う表現は、他の無量壽經六異本には全く見られないから、法賢の意圖から爲されたものであるとするなら、瑜伽大教王經の此の個處と大いに類似性があると思われる。更に、此の成佛思想を示す記述を利他行との關係に於いて見ると、月光菩薩經とその異譯〔菩薩本緣經・賢愚經の一

部分〕の表現法、比較的原本に忠實であると考えられている玄奘譯の異譯を持つ八名祕密陀羅尼經の記述等の相應により、特に法賢の譯出經典には成佛思想と利他思想を示す表現が著しいと云える。

法賢の譯出經典の檢討から判明する以上の諸點の結論として、無量壽佛名については、その原語の如何にかゝらず、陀羅尼中の音譯を除いて、すべて「無量壽」の語を以つて表現し、内容的には淨土教思想に於ける報身報土の概念では無く、密教經典譯出の影響から法身佛的な色彩が加味されていると考えられる。抄譯される章段、或いは、轉化された記述形態については、譯出經典全體の特徴であり、此の事は異本との相違を檢討する事によつても指摘される。譯語の問題については、名稱列舉を例にとつてもその統一性は無く、意譯すべき言葉に音譯語を用い、必ずしも嚴密な意味を持たせてはいない。更に、その思想形態の特異性については、無量壽莊嚴經本願文と類似せる形態が見られ、異本との比較による檢討からも利他行と成佛思想の點に於いて特徴が見られる。無量壽莊嚴經について云えば、法賢は密教經典の譯出者と云うべく、唯一の淨土經典である本經においても、本願文・阿彌陀佛をはじめ、その影響を受けていることが知られる。尙、法賢に關しては、諸史傳の記述より法天・天息災との同名説、異名説があるが、此の點については次の問題として檢討する

所存である。

- 1 經典名は紙數の關係から大正藏目錄番號を記す。No. 890 (大正 18); 559 c, 561 b, 562 c, 563 c, 564 b, 574 c, 577 b, 578 c, 579 c, 582 b.c. No. 891 (大正 18); 583 a, 584 c~585 b. No. 934 (大正 19); 80 b. No. 1051 (大正 20); 64 b, 65 a, 66 b.c. No. 1117 (大正 20); 506 b.c. No. 1118 (大正 20); 507 a. No. 1350 (大正 21); 864 a. No. 1384 (大正 21); 904 c.
- 2 No. 290 (大正 10); 592 b.
- 3 No. 278 (大正 9); 589 c. No. 279 (大正 10); 241 a. No. 289 (大正 10); 591 c.
- 4 (大正 9); 694 c, 764 b, 786 b.c.
- 5 No. 296 (大正 10); 879 c. No. 643 (大正 15); 688 c, 689 a. No. 1012 (大正 19); 684 b.
- 6 (大正 10); 339 c, 443 ab.
- 7 No. 301 (大正 10); 991 a. No. 310 (大正 11); 347 c, 348 b.c, 349 c. No. 1082 (大正 20); 198 a, 200 註③. No. 1667 (大正 32); 591 b.
- 8 No. 367 (大正 12); 348 c, 349 c.
- 9 No. 476 (大正 14); 574 b, No. 1094 (大正 20); 403 c.
- 10 (大正 12); 321 ab.
- 11 No. 290 (大正 10); 592 b. No. 890 (大正 18); 582 b~c. No. 1051 (大正 20); 65 ac. No. 1117 (大正 20); 506 b. No. 1381 (大正 21); 903 c.
- 12 如來十力、四無所畏、四無礙智
- 13 十六心念、聲聞四果、十八不共法、三十二相大丈夫相、八十種隨形相好
- 14 (大正 12); 650 c.
- 15 拙稿「無量壽經過去佛名について」〔札幌大谷短大紀要第一號〕
- 16 註 2、3
- 17 No. 488, No. 1288, No. 1350 etc.
- 18 望月信亨著『佛教經典成立史論』二〇六頁~二〇九頁、木村泰賢著『大乘佛教概論』四七〇頁~四九〇頁、池本重臣著『大無量壽經の教理史的研究』二九六頁~三五二頁、等
19. 拙稿「無量壽莊嚴經本願文について」〔印佛研第十一卷第一號〕
- 20 No. 890 (大正 18); 564 a~568 b.
- 21 佛祖統記・祥符法寶錄等
- 22 拙稿「法天改名法賢說について」〔宗教研究昭和四十年大會紀要〕